日本の抑揚とリズムを共通項として国語科と関連させる音楽授業の可能性

樋根恵子

目的

限られた音楽科の授業時間で子どもたちの音楽活動を豊かに展開させる為には、他教科と関連づけることが有効でないかと考えた。そこで、①伝えたいことをうまく自分の言葉で表現できにくい、②楽器の音色への意識が不十分であった子どもたちの姿を踏まえ、音と言葉を関連させることで表現したいことをより適切に表現するための研究授業を構想した。

研究実践を通じて、日本語の抑揚とリズムを共通項として国語科と関連させた音楽授業をした場合、子どもの表現活動がどう発展するか、その筋道を明らかにすることを目的とする。

結果

研究実践では、漠然としたイメージを、音楽の構成要素に着目させることで、より明確なイメージへと変えていき、音として表現していく姿がみえました。すなわち、国語科において日本語のもつ抑揚・リズムの着目させた授業を展開することで、リズム・抑揚（音高）という共通項によって、音づくりへと発展させていた。つまり、音楽授業へと発展させていくことができたのである。

方法

研究の方法としては、実践的方法をとった。2005年6月に大阪市立茨田東小学校3年生を対象とし、国語科の時間と関連させて「にほんごに親しみよう！」を実施し、その分析を行った。歌詞を作詞し、内容にふさわしい表現を工夫し、日本語の抑揚とリズムを活かすリズムや旋律を創作した。

内容

1. 研究実践の概要
   ■題材名 「にほんご」に親しみよう！
   ■指導事項
     ①歌詞の内容にふさわしい表現の仕方の工夫
     ②音の組合せを工夫し、簡単なリズムや旋律をつくって表現する。
   ■指導内容 言葉の抑揚・リズム・意味
   ■教材 NHK『にほんごであそぼ』から「かんづくし」

2. 研究実践の分析

<table>
<thead>
<tr>
<th>課 程</th>
<th>学習活動</th>
<th>指導者の 学習観</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①</td>
<td>創作</td>
<td>グループで「ごめんし」をつくる</td>
</tr>
<tr>
<td>②</td>
<td>分析</td>
<td>キーワードを関連</td>
</tr>
<tr>
<td>③</td>
<td>分析</td>
<td>キーワードに基づき、授業設計</td>
</tr>
<tr>
<td>④</td>
<td>分析</td>
<td>音楽の組合せを考える</td>
</tr>
<tr>
<td>⑤</td>
<td>分析</td>
<td>キーワードに基づいて、授業設計</td>
</tr>
<tr>
<td>⑥</td>
<td>分析</td>
<td>創作活動の設計</td>
</tr>
</tbody>
</table>

NII-Electronic Library Service
子どもたちは、声や音・動きに対する興味をもった上で、創作活動をすすめている。まず、詩（歌詞）を考えいく中では、リズムが最大の着眼点となった。ここでは、言葉をのばしたり、休みを入れたり、字数を増やしたりすることでリズムが整えられた。言葉を厳選していなくても、言葉への興味・関心が高まり、理解が深まったことで、言葉の音節を意識し、言葉のモチーフに着目し拍を整え、拍子を合わせていった。

リズムが整うとリズムの速度にも目が向けられるようになった。次第に速くなっていく演奏が、当初多かったが、楽器の鳴らしかたや演奏分担、休みの取り方を工夫していくことで、一定に保たれるようになっていった。

そして、詩（歌詞）作成の第3段階では、リズムだけでなく音節の抑揚に目が向けられた。言葉をより伝えるために、言葉の抑揚に着目し、発音に高低差をつける、という工夫がみられるようになった。そして、リズムが整えられると、音に耳を傾けるようになっていった。

第1段階として、音量に視点があてられた。ただ「言いたいことがきこえないから、もっと大きな声を出さないといけない」という意識から、「ここでは、この言葉を、こんな風に伝えていかないと、こんな風に演奏しよう」というイメージを持った表現の工夫へと発展していった。

次に、音色に関心がうつった。音と言葉を関連づける上で考えたキーワードから探した楽器の音色をイメージに合わせて選択していた。楽器自体の選択はもちろんのこと、1つの楽器の奏でる音色1つ1つにも着目し、より表現に応じて音色の選択を各言葉に合わせて行っていた。よって、同じ楽器を使用しても、表現する言葉によって、ニュアンスの全く異なる演奏となった。このような各段階を踏まえ、動きを含めた声と楽器のバランスがとられた作品の完成に至ったのである。